

地域志向教育における「5 学部混合地域 PBL」の取り組み

—まちづくりと企業経営を学ぶ PBL I・II を中心に—

清水 恵美子*

(2017 年 12 月 8 日 受理)

Efforts of Regional PBL Crossover Faculties in Community Oriented Education: Focusing on the PBL I to Study Community Development and the PBLII to Study Business Management

Emiko SHIMIZU

(Accepted December 8, 2017)

はじめに

現在茨城大学では、学部・大学院の組織再編などの大学改革の取り組みを大きく進展させている。平成 29 年度より、全学教育改革の一環として全学教育機構を設置し、クォーター制の導入などカリキュラムの改革を実行した。本学の基盤教育は、ディプロマ・ポリシー（卒業基準）で定めた①世界の俯瞰的理解、②専門分野の学力、③課題解決能力・コミュニケーション力、④社会人としての姿勢、⑤地域活性化の能力を全学共通に育成するものである。そのような教育の実現のためには、教室でのアクティブ・ラーニング、地域や企業での実践演習やインターンシップ、海外での留学・短期実習などを活用し、学生自らが考え、周囲の仲間と議論し、問題の解決に挑戦するといった経験の蓄積が重要となる。そのための大きな柱のひとつが、地域志向教育である。

これまで本学では、各専門分野の教育において地域志向教育が取り込まれ、地域をフィールドにした PBL（課題等をもとにその解決等を通じて学習する科目）も、学部単位で実施されてきた。これらの教育実績に基づき、平成 26 年度に採択された「地（知）の拠点整備事業」（大学 COC 事業）では、1 年次から実施する学部横断型の「5 学部混合地域 PBL」を平成 28 年度から開始した。これを受講した学生が、さらに学部の専門的な地域 PBL で学修することで、本学の PBL 科目全体が発展していくことが狙いである。

「5 学部混合地域 PBL」実施の前に、すべての学部学生の地域活性化への意欲を喚起し、課題を協働して解決する力を育成する必要がある。そのため、平成 27 年度より全学部生に必修科目として「茨城学」を課している。「茨城学」は地域の理解という点では、本学の独自性を示すものであり、キャリア教育とグローバル教育の観点でも土台となる。そこで本稿では、本学の地域志向教育の取

* 茨城大学社会連携センター（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1 ; Social Collaboration Center, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan).

り組みとして「5学部混合地域PBL」の実施について、まちづくりと企業経営を学ぶ「5学部混合地域PBL I」および「5学部混合地域PBL II」を中心に述べる。

1. 地域志向教育の展開

COC事業は、大学等が自治体と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図ることを目的としている。そのために、本学では学長がトップ（機構長）となってCOC統括機構を設立し、茨城県やキャンパスのある水戸市・日立市・阿見町などの10自治体、および企業等の連携先をはじめ、地域と協力して事業を進めている。

主な取組み内容は、地域課題の解決と人材育成である。人材育成では、27年度に「地域志向教育プログラム」を設立し、地域での教育を通して、地域に頼られる学生の育成を始めた（図1）。地域を多角的に捉えながら地域課題と向き合い、学部1年次から大学院まで一貫して取り組める学部横断型のアクティブ・ラーニングである。特にPBLにおいては、出来るだけ地域課題を題材にし、学生が現実の社会に触れ、実践的で主体的な学びとなるよう実施している。地域に頼られ地域を先導できる学生を育成し、さらには地域の課題解決と活性化を目的としている。

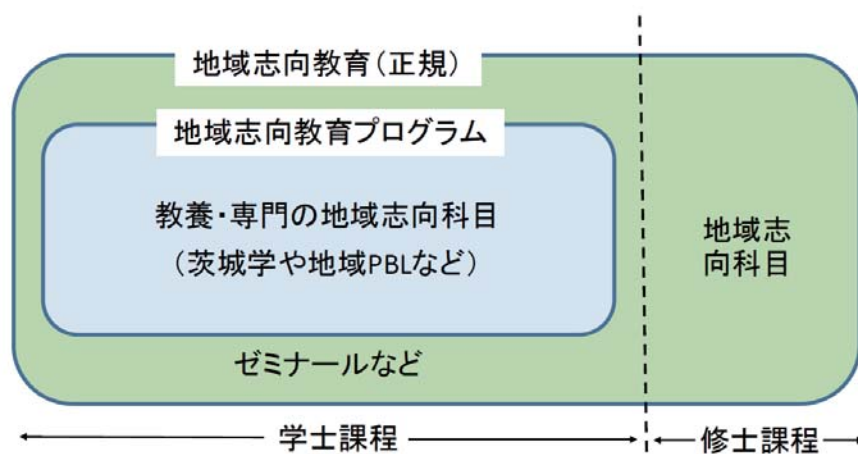


図1 茨城大学のCOC地域志向教育

学士課程では平成27年度から「地域志向教育プログラム」を開始すべく準備を進めた。プログラムには、後述の「茨城学」、「5学部混合地域PBL」のほか、教養と専門の地域志向科目、専門科目を背景とした学部の地域PBLなどがある（表1）。育成する具体的な人物像は、「地域志向で独創力ある学生」、「現場志向で問題解決力ある学生」、「未来志向でリーダー力ある学生」である。プログラムの修了者には修了証を発行する。これは修了証を持った学生が地域に役立つ人材であることを、本学が認定するものである。そのため、単位要件に加え、地域PBL科目における報告書やプログラム科目以外の成績も勘案し、発行する。

地域志向教育プログラムは、平成29年度から全学教育機構共通教育部門のCOC地域志向教育プログラム部会で運営されている。

表1 地域志向教育プログラムの科目区分

科目の区分		科目名・授業題目名	必修・選択必修・選択	履修年次	備考
全学教育 機構	基盤教育科目	「茨城学」	2単位必修	1年次	
		地域志向科目	選択	1年～4年次	修了要件に算入できるのは4単位まで
	全学共通科目	5学部混合地域PBL科目	2単位選択必修	1年～4年次	「自由履修」の科目
学部	専門科目	地域PBL科目		2年～4年次	工学部は3年次から開始
		地域志向科目	選択	2年～4年次	
修了要件単位数			合計8単位以上		

2. 「茨城学」の実施

「5学部混合地域PBL」について述べる前に、「茨城学」について簡単に説明しておきたい。COC事業では、平成27年度から、教養科目に地域志向系科目「茨城学」を1年次必修科目としてスタートさせた（工学部知能システム工学科夜間主コースは29年度から開始）。平成29年度からは、基盤教育科目の入門科目として開講されている。

「茨城学」は、茨城の自然・歴史・地理・文化・産業などの学修を通じ、学生に茨城についての理解を深めさせると同時に、地域を多角的に捉え、地域の課題等を考える力を身に付けさせる科目である。新入生全員が「茨城学」を学ぶことにより、地域に関心を持ち、地域に関わって活動したいと思う学生の層を厚くすること、地域を担う人材育成の入り口となることがねらいである。開講直後は、地域社会から関心が寄せられ、本学の社会的な認知度が上昇し、地域連携活動においても進展があった。しかし、茨城や地域に関心のない学生にとっては、必修科目であることに抵抗を感じる者が少なからずいる。このような学生のモチベーションを上げ、押しつけでなく主体的に受講できるよう、なぜ「茨城学」が必修科目なのか、理解できるように努めている。

平成27年度は前期に人文学部、教育学部、後期に理学部、農学部、工学部の1年生約1,700名が履修した。1クラスの受講生が400名を超えるため、教室は講堂（約550名収容）を使用している。平成28年度後期は講堂改修と再履修生の受講のため、日立キャンパス、阿見キャンパスを含む複数の教室をヴァーチャル・キャンパス・システム（VCS）配信でつなげて実施した。

平成29年度に3年目を迎えた「茨城学」は、夏季休暇をはさんだ第2クォーターと第3クォーターに毎週4クラス実施された。全学部の一年生が同時に受講する体制となり、教室⇒地域⇒教室での学修ができるようになった。さらに授業内容が、COCプラス協力校の常磐大学、茨城キリスト教大学、県立医療大学と、VCS接続やDVDを通して共有されることになった。大学の枠組みを超え、講義内容や、講師とのディスカッション時に学生から出された意見を共有している。時間割の関係等により授業の受講ができていない茨城工業高等専門学校では、作成したDVDを学内図書館での閲覧という形で活用されている。

地域の課題は、ひとつの専門領域で解決することは困難であり、COC専任教員（執筆者）が授業全体をコーディネートし、本学教員だけでなく、自治体、企業からゲスト講師を招いている。平成29年度から授業内容を総論から各論へと展開する構成に変更したことで、地域の課題を考える

「茨城学」の意義が明確になった。

開講以来年2回、本学教員と「茨城学」FD・SDを実施し、課題の共有を図ってきた。平成29年度は本学教員とともに、自治体関係者、前年度の受講生が一堂に会し、FD・SDを実施した。過去の授業資料と課題、アンケート結果、今年度の運営体制を把握し、授業目的を共有した。これにより、各担当者の授業運営に関する理解が深まり、事前の打ち合わせがスムーズになった。

授業では、アクティブ・ラーニングを取り入れ、学生の主体的な学修を求めている。講義形式は、毎回ゲスト講師による40分の講義の後、学生は提示された課題等について振り返り用紙にまとめ、グループ内で意見を交換し、その後専任教員の司会でゲスト講師と学生との間でディスカッションを行う(図2)。平成27年度後期から座席表を導入して、多くの学生とディスカッションできるよう工夫している。平成29年度からは人文社会科学部と工学部の学生がともに受講することになり、教育学部以外の3クラスが学部混合の構成になった。その結果、学生の積極的な学修態度、アクティブ・ラーニングにおける多様な意見の交換につながった。グループワークのサポートのために、COCコーディネーターやティーチング・アシスタントが複数つき、授業運営を支えている。



図2 「茨城学」での意見交換風景

3. 「5学部混合地域PBL」の取り組み

COC事業における地域課題の解決と人材育成は、それぞれ別々に実施するものではなく、地域課題の解決を人材育成にも活用する。特にPBLにおいては、地域を題材にし、学生が現実の社会に触れ、実践的で主体的な学びとなるように努めている。平成28年度には、学部の枠を取り払って行う「5学部混合地域PBL I A」と「5学部混合地域PBL II A」を新しく開講した(平成29年度は「5学部混合地域PBL I」、「5学部混合地域PBL II」と科目名が変更)。授業は夏季休業中の連続する3日間に実施され、COC専任教員を中心に、複数のCOCコーディネーターによって運営される。

(1) 「5学部混合地域PBL I A」の開講

1) 取り組みの概要

平成28年、1年生から履修でき、学部横断で実施するPBLとして「5学部混合地域PBL I A」が開講した。地域を自ら考え、地域で行動する人材を育成する第一歩として、多様な分野から地域にアプローチできるテーマを設定し、学生が地域で行動する導入的役割を担うことを目的としている。

本授業は、ひたちなかまちづくり株式会社(茨城県ひたちなか市)の協力を得て、勝田駅前商店街を含めたひたちなか市全体をフィールドとして実施した。受講生は「まちづくり」とは何かを考え、講義、商店街見学、市内巡見、ヒアリングを通して、ひたちなか市の現状と多様性、駅前周辺の空間が抱える課題を認識する。魅力的な「まちづくり」のために、ひたちなかまちづくり株式会

社が取り組むべき内容や、学生の参画の方法について話し合い、振り返りやワークショップを重ねながら、地域の未来づくりの提案を行うことが目標である。

授業は、平成28年9月14日（水）～9月16日（金）に実施された。受講生は37名で、1年生が33名（人文26名、教育2名、理4名、工1名）、2年生が4名（人文1名、理1名、農1名、工1名）である。7月7日（木）に説明会を行い、日立および阿見キャンパスにもVCSで配信した。

2) 学修内容

【1日目】

ひたちなか市と勝田駅前商店街の現状を知るために、ひたちなかまちづくり株式会社や商店街に関わる4名の講義を受けた。講師との質疑応答、グループ・ディスカッションの後、感想を振り返り用紙に記入した。次に商店街を見学し、現状と課題について発見したことを、グループ・ワークで共有した。講師や活動の詳細は下記の通りである。

- ① ガイダンス：自己紹介、事前課題「魅力的なまち」について発表、グループ分け
- ② 講義「ひたちなかまちづくり株式会社の設立経緯と目指すまちづくり」
講師：ひたちなかまちづくり株式会社 代表取締役 小野修氏
ひたちなかまちづくり株式会社 大谷永浩氏
- ③ 講義 「ひたちなか市の歴史」講師：表町専門店商店街振興組合 代表理事 小池明弘氏
「まちづくりとは何か？」講師：株式会社オセヤー級建築士事務所 藤田康広氏
- ④ 勝田駅前商店街を見学、事前に許可を得た店舗に立ち寄りヒアリングを実施。
- ⑤ 商店街の現状を分析し、課題を話し合うグループ・ワークを行った。

【2日目】

午前、前日の講義や見学を踏まえ、地域に対する知見を広めるため、バスでひたちなか市を巡見した。途中で子育て支援、高齢者の買い物支援に取り組む施設を訪問し、代表の方から話を聞いた。午後は、ひたちなかまちづくり株式会社と市民交流センターにおいて、まちづくりに従事している多彩な領域の方々にヒアリングを行った。グループワークを通して、まちの課題の多様性を把握し、まちづくりにおける様々な領域の知識と人材の必要性を認識した。

- ① 市内巡見：ひたち海浜公園、コストコやジョイフル本田のあるエリアを見学
- ② 施設の見学 ○子育てカフェ Copain（代表 岡崎知美氏）（図3）
○NPO 法人くらし協同館なかよし（理事長 塚越教子氏）（図4）
- ③ ヒアリング 1グループにつき2名から、まちづくりをテーマに話を聞いた。ヒアリングはひたちなかまちづくり株式会社と市民交流センターの2か所で行った。協力者は次の9名である。

三和システム株式会社 取締役会長 西野好海氏
株式会社日立ライフ 常務取締役 大輪孝則氏
一般社団法人ひたちなか青年会議所 理事長 増田直氏
ひたちなか海浜鉄道株式会社 代表取締役 吉田千秋氏
津田コミュニティセンター 事務長 大畑まり子氏

高倉建設工業株式会社 代表取締役 高倉美佳氏
NPO 法人未来ネットワークひたちなか・ま
理事長 高島洋平氏、センター長 五十嵐康夫氏
ひたちなか市 水道事業管理者 村上剛久氏



図3 子育てカフェ Copain の見学



図4 暮らし協同館なかよしの見学

④ ワークショップ

市内巡見、施設訪問、ヒアリングを踏まえて、まちの多様な課題を認識し、「魅力的なまち」を提案する導入となるワークショップを実施

ペアで順番に考えを述べてグループ全体で話し合い（シンク・ペア・シェア）、ヒアリングシートのとりのまとめ、グループ内の共有化を図った。また、混沌としたまちの事象を理解するために、複数のメンバーで意見、事実等を付箋紙に記述し、集めた中から親和性の高いグループを探し、まとめていくことで構造や事象を整理した（親和図法）。（図5・6）



図5 グループ・ワークをする学生たち



図6 グループ・ワークの成果

【3日目】

前日作業したワークシートにタイトルをつけ、「魅力的なまち」のテーマについて話し合った。二日間の学修で得たまちについての気づき、発見を言語化し、勝田駅前商店街の課題解決のために、どのようなことをひたちなかまちづくり株式会社に提案し、そこに学生としてどう関わるのか、アクションプランを検討した。

- ① 講習：地域の客観的データを得る方法のひとつとして、リーサスについて学ぶ。
- ② グループ・ワーク：ひたちなかまちづくり株式会社への提案を検討

- ③ グループ発表（図7）
- ④ 講評と振り返り（講師：ひたちなかまちづくり株式会社 大谷永浩氏）

ひたちなか市経済部の3名が、学生の発表を参観した。行政側の視点で講評をいただいた。



図7 まちづくりに対する学生の発表

3) 授業の成果と今後の課題

受講生が提出した事前課題、毎授業のワークシート、授業後のレポート、およびグループワークにおける作業や発表の様子から、下記の成果が得られたと考える。

○学生たちのまちづくりを考える視点に当事者意識が加わり、自分が住みたいまちとはどういうところか、そのためには自分は何ができるか、を考えて主体的に取り組むことができた。

○様々な人たちとの交流を通して、まちの課題やまちづくりの方法を多角的に捉える視点が養われ、地域に積極的に参画しようとする意欲が高まった。

○初日には参加意欲が低いと思われる学生も、様々な学修活動（ヒアリング・グループワーク・市内巡見など）から刺激を受け、次第に主体的な参加姿勢をとれるように成長した。

○他学部の学生と話し合いを通して、多様な考え方を知る機会を得、視野が広がった。授業後には、水戸キャンパスにひたちなかまちづくり株式会社の大谷氏を招いて話し合うなど、さらなる交流の場が設けられた。

一方、今後の課題として次の点があげられた。

○過密なスケジュール

基礎的な学びの時間や深く考える時間の十分な確保が難しかったため、授業スケジュールの見直しが必要である。また、3日目にリーサスの講習や市内地図を配布したことにより、前日からのグループ・ワークの流れが中断してしまった。

○ワークショップの一貫性の欠如

授業は授業担当者（執筆者）と複数のコーディネーターによって運営されるため、事前に打ち合わせを入念に行ったが、授業中の学生の態度や進度から指導の修正を余儀なくされた。その情報共有が十分になされなかったため、受講生に戸惑いが見られた。

○募集人数を超える履修者

履修者数は会場（ひたちなかまちづくり株式会社）のキャパシティから30名を予定していたが、事前説明会に60名参加したことから、連携先と相談し希望者がすべて受講できるようにした。しかしグループ・ワークやヒアリングなどの活動には会場の広さは不十分であった。

（2）「5学部混合地域PBL I」への発展

1) 取り組みの概要と改善点

平成29年度には「5学部混合地域PBL I」を実施した。昨年度の反省をもとに、ひたちなかまちづくり株式会社と打ち合わせを数回行い、授業構成、活動の時間配分、ヒアリングの形態などを変更した。連携先として新たにひたちなか商工会議所の協力を得ることができ、主な学修活動の場

所をひたちなか商工会議所の会議室に変更した。これによって学修活動に十分な広さを確保することができた。また3名のCOCコーディネーターが全日授業運営に参加することで、指導者間の情報共有とワークショップの一貫性に努めた。

学修内容を再考し、全体テーマを「ひたちなか市の勝田駅周辺のまちを知り、地域の未来づくりへの提案を行う」とした。このテーマにのっとり、昨年度実施したリーサス講習やバスによる市内巡見を割愛し、商店街を含む勝田駅周辺をフィールドとした活動に焦点を絞った。加えて授業初日に、昨年受講した2年生に感想を述べてもらうとともに、受講生にひたちなかまちづくり株式会社の事業方針（まちのリノベーション・パワーアップ・コンシェルジュ・ライフサポート・ビューティアップ・プロモーション）からテーマを選択させ、同一テーマを選択した学生同士でグループを編成した。グループごとにまちづくりへのアプローチを明確にすることで、学修意欲と三日間のグループ・ワークの質を高めることが狙いである。各グループに一人リーダー（キャプテン）を決めさせ、日替わりで交代させることで、誰もが当事者意識と責任感をもって学修活動に専念できるように試みた。

授業は、平成29年9月13日（水）～9月15日（金）に実施された。受講生は39名で、1年生が38名（人文社会学部13名、教育2名、理1名、農8名、工14名）、3年生が1名（人文学部）である。人文学部の受講生が多数を占めた「5学部混合地域PBLIA」と比較すると、農学部と工学部の受講生が増加したことがわかる。これは平成29年度から全学部一斉に「茨城学」を受講するようになったためだと考えられる。

6月20日（火）に説明会を実施し、授業2日目のワークショップで用いる「マインドマップ」を紹介し、予習としてその練習を事前課題として取り組ませた。事前課題としてほかに「あなたにとって魅力的なまちとは」、「この授業で学びたいこと」について考えて来るよう指示し、授業初日の導入や最終日の振り返りに活用した。事前課題、毎授業の振り返り用紙（ワークシート）、授業後のレポート、学習活動の関心意欲態度を総合して評価した。

2) 学修内容

【1日目】

テーマは「まちを知る・見る」。まず事前課題に記した「魅力的なまち」や受講動機などについて発表し、それを付箋紙に書いて貼り出し、授業終了日に確認できるようにした。ひたちなかまちづくり株式会社の目指すまちづくりや、昨年度受講した学生から感想を聞いたあと、グループ分けを行った。午後はインスタントカメラを持参し、風景を撮影しながら勝田駅前商店街を見学した（図8）。現状と課題について発見したことを、グループ・ワークで共有した。



図8 勝田駅周辺商店街のまち歩き

- ① ガイダンス：自己紹介、事前課題「魅力的なまち」、受講動機などについて発表

② 講義「ひたちなかまちづくり株式会社と目指すまちづくり」

講師：ひたちなかまちづくり株式会社 大谷永浩氏、人文学部 2 年生 1 名

③ グループ分け、グループ・ディスカッション

④ フィールド・ワーク：勝田駅～ひたちなか商工会議所周辺のまち歩き（日立ライフを起点にひたちなかまちづくり株式会社・株式会社サザコーヒー本店・文化会館の範囲内）

⑤ 商店街の現状分析と課題発見のワークショップ：KJ 法風

【2 日目】

テーマは「まちづくりについて聞く・考える」。午前は、ひたちなか市の表町商店街及びまちづくりに関わる 2 名から講義を受けた。講師とのディスカッションの後、多様な方法でまちづくりに関わっている方々にヒアリングを行った。まちづくりのアプローチの多様性を理解した後、魅力的なまちづくりについて考えるワークショップを行った。

① 講義「ひたちなか市の歴史」講師：表町専門店商店街振興組合 代表理事 小池明弘氏

「まちづくりとは何か？」講師：株式会社オセヤー級建築士事務所 藤田康広氏

③ ヒアリング：1 グループにつき 2 名から、まちづくりをテーマに話を聴いた（図 9）。昨年度の受講生から評価の高かった方々を中心に依頼し、次の 5 名の協力を得た。

株式会社日立ライフ 常務取締役 大輪孝則氏

真宗大谷派正安寺 住職 増田直氏

ひたちなか海浜鉄道株式会社 取締役 村上剛久氏

津田げんき会 役員 横山明美氏

NPO 法人くらし協同館なかよし 理事長 塚越教子氏

講師からは取り組んでいる活動内容とその理由、まちづくりの面白さや難しさ、大切にしていること・ひと・ものの話に加えて、学生とともに行いたいプロジェクトについて提案があった。学生は講師の話聞き、質問を検討した後、ディスカッションを行い、ワークシートに記入した。

④ ワークショップ「魅力的なまちづくりを考える」

まず 1 対 1 のインタビュー形式で自分は何がしたいかを発表しあい、付箋紙で整理しながらグループで一番取り組みたいことを考える。次に「マインドマップ」の手法を用いて、一番したいことについて誰のために、誰と、なぜやるのかなどを明確にし、グループごとに発表する（図 10 参照）¹。



図 9 まちづくりに関するヒアリング

【3 日目】

テーマは「ともにまちを創る」。昨日のワークショップで作成した「マインドマップ」をもとに、模造紙の掲示物を作成して具体的なプランを創った。その際、現実的なプラン作成のため適宜ひたちなかまちづくり株式会社大谷氏からの助言を得た（図 11）。魅力的なまちづくりのために、どの

ようなことを提案し、そこに学生としてどう関わるのか、アクションプランを発表した。

- ① グループごとにプレゼン準備：タイトル・目的・活動内容・協働者・対象者・予算・時期・場所・スケジュール（準備期間）・活動頻度を検討（図12参照）
- ② プラン発表プレゼンテーション：10グループから次のプランが報告された（図13）。
音楽でつながろう地域の輪、自然体験とクリーンアップ、ひたちなか View Remodeling 湊線でネモフィラ見に行こう、輪を広げよう！寺子屋から、Science Community Project、空き店舗交流スペース化、Rock in Café、勝田駅周辺 PR ツアー、3世代交流イベント
発表後は良いと思ったグループの掲示物に共感シールを貼った。
- ③ 講評、全体を通じての振り返り：授業初日に発表した受講動機と比較してワークシートに記入。

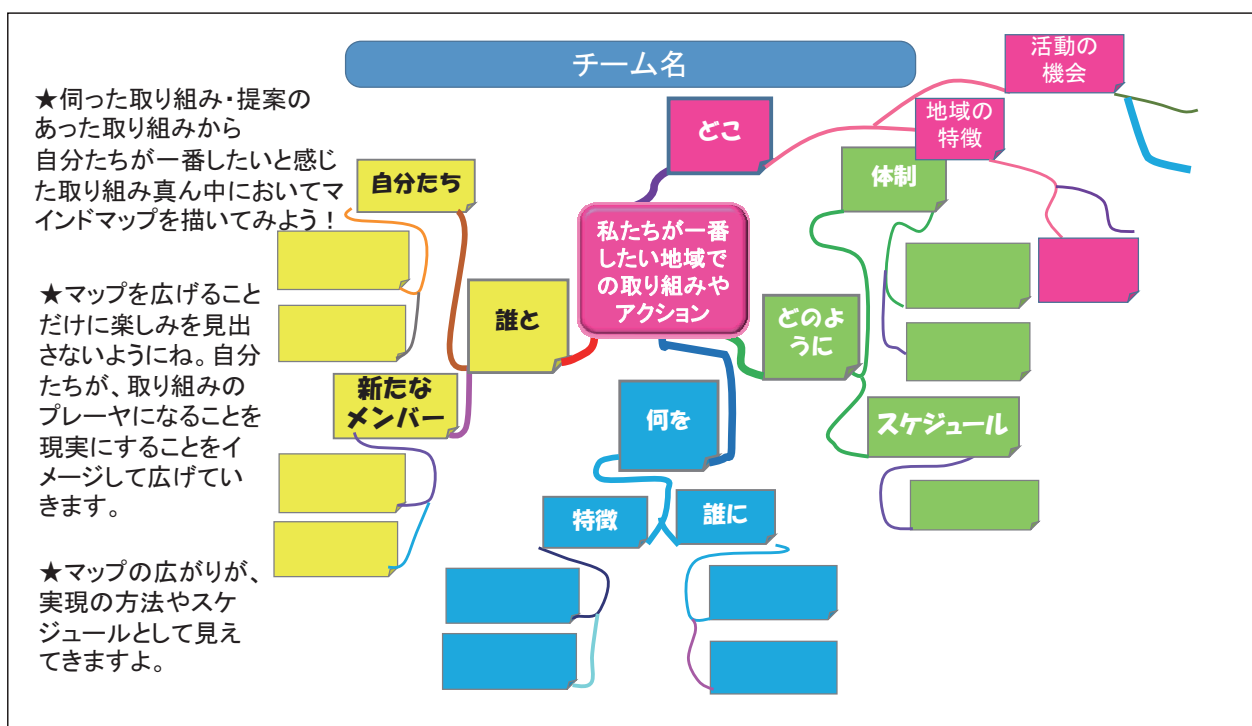


図10 マインドマップ的情報整理イメージ



図11 大谷氏から助言を受ける学生たち



図13 学生によるまちづくりプラン

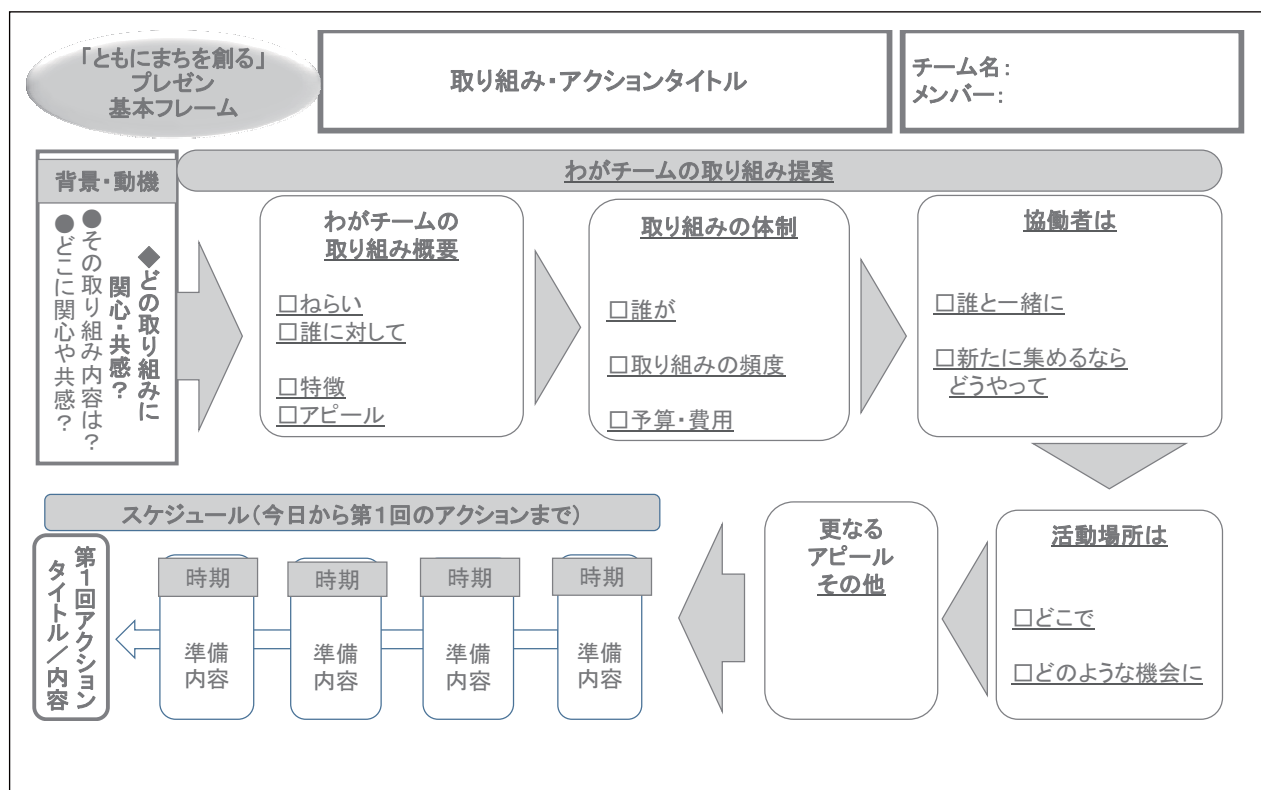


図 12 プレゼン基本フォーム

3) 授業の成果と今後の課題

最終日の受講生のワークシートには、次のような記述がみられた。

「最初まちづくりはその地域に住んでいる人たちをはじめとした誰かのために行うものだと思っていたが、自分がどうしたいのか、自分のためにしていくものだと感じた。比較していくのではなく、その地域の特徴に合わせて時代や地域のニーズに合わせてまちづくりをすることが大切だと感じた」(人文社会科学部1年)

「ひたちなか市に住んで15年以上になるが、まちづくりに取り組む人たちの姿を見て、地域のために何かしらの方法で貢献したいという考えは一層深まったと思う」(理学部1年)

「自分たちの目でまちを見て歩き、その課題や問題点に触れたことで、まちづくりを考える際、つくる側の人間の視点を持つことができたと思う。自分たちの考えた企画が現実のものとなったきを想像すると今までにないような達成感を得られた。」(工学部1年)

「今回他学部の人たちも多かったため意見は多種多様であり、ディスカッションして私たち学生にできることは少ないと思っていたが、協力してくださる大人はたくさんいて、自分たちの住みよい暮らしを作るといのが大事なまちづくりの一つであるということがわかった。」(農学部1年)

学生の提出物(毎授業の振り返り用紙や授業後のレポート)を読むと、「まちづくり」や地域の課題を主体的に考え、「まち」を多角的な視野からとらえる視点を養うことができたと考えられる。また、現地視察、ヒアリング、グループワーク、振り返り等を通して、地域の現状を理解し、ひたちなかまちづくり株式会社や、ひたちなか市のまちづくりに関わる方々の協力を得ながら、学生の参画方法について具体的な提案を行うことができたといえる。

授業運営面については、昨年度の課題であげられた過密なスケジュール、ワークショップの一貫

性の欠如は解消され、履修希望者を全員受け入れても十分な広さの会場を確保することができた。さらなる学修効果を高めるために、以下を今後の課題とした。

○時間配分の再考

初日のまち歩きは、9月中旬の暑さと学生の健康を考慮して1時間としたが、今年度は歩く範囲を拡大したため、90分でも良かった。時間配分がうまくいかなかったとき、現場で柔軟に対応できるよう、余裕のあるタイムスケジュールを組む必要がある。学生は理解のスピード（インプット）は速いが、模造紙に書く（アウトプット）の作業は遅い。ワークシート記入や、模造紙に基本要素のフレームを書かせる時間を十分確保したい。

○講師の欠席

ヒアリング協力を依頼していた講師の一人が仕事の都合で当日急に欠席となった。協力者を選択する際は、このような事態を十分考慮する。

○参考図書の見直し

事前課題に提示する参考図書が授業中に活かされていないため、来年度は見直す。

○ワークショップの進め方

ワークショップの方法について、ひたちなかまちづくり株式会社の講師とコーディネーターとの間で学生への指示内容に相違があった。受講生が混乱しないよう、事前に十分な打ち合わせを行う必要がある。

（3）「5学部混合地域 PBL II A」の開講

1) 取り組みの概要

「5学部混合地域 PBL II A」（平成29年度は「5学部混合地域 PBL II」）は、「5学部混合地域 PBL I A」を受講した学生が次に履修する科目に位置づけられる。2年生から履修できる学部横断のPBLとして開講した。地元企業の地域における役割や課題について考え、企業と地域の未来づくりに参画することを目的とする授業で、地域を自ら考え、地域で行動する人材育成を目指す。

開講の背景には、本学が「地域再生の拠点となる大学」を目指すため、地元企業と持続的な関係を継続していくことが大切と考え、平成27年度から企業訪問を実施し、パートナー関係を構築してきた取り組みがある。これまで行われてきたPBL科目は、主に自治体と連携して実施する傾向があったが、「5学部混合地域 PBL I A」や「II A」は企業と連携して実施する点に特徴がある。

具体的には、パートナー企業の株式会社サザコーヒー（茨城県ひたちなか市）と連携して実施し、主に「モノ」、「環境」、「ひと」をテーマに話し合い、新店舗の提案を行った。サザコーヒー本店および周辺の直営店、工場、ひたちなかまちづくり株式会社など、勝田駅周辺をフィールドとし、企業経営、技術、マーケティング、地域貢献、人材育成などの面から企業経営と地域について考えた。

授業は、平成28年9月19日（月・祝）～9月21日（水）に実施された。受講生は21名で、全員2年生（人文11名、教育2名、理2名、農3名、工3名）である。7月8日（金）に説明会を行い、日立および阿見キャンパスにもVCSで配信した。

2) 学修内容

【1日目】

1日目のテーマは「モノ」。サザコーヒーの経営の特徴や強みを考えるため、本店や工場の見学を行い、講義を受けた。経営者側だけでなく顧客側の意見を聞くため、本店や直営店などでヒアリングを行い、ひたちなかまちづくり株式会社社会議室において、気づいたことをグループ・ワークで共有した。講師や活動の詳細は下記の通りである。

① ガイダンス、店内見学・本社工場見学 (図14)

案内：代表取締役 鈴木太郎氏、店舗事業部部長 砂押律生氏

② タクシー移動のあと第2工場見学

カップリング (図15)、バリスタ本間啓介氏 (店舗事業部) の練習見学

講義「サザコーヒーのモノの考え方・環境のつくり方」 (講師：鈴木太郎氏)

③ 顧客へのヒアリングと調べ学習

協力店：サザコーヒー本店、勝田駅前店、MEGA ドン・キホーテ勝田店

④ ワークショップ「サザコーヒーの強み・弱みとは何か」

鈴木太郎氏とのディスカッション



図14 本社工場見学



図15 第2工場におけるカップリング

【2日目】

2日目のテーマは「環境」。魅力的なカフェ空間を考えるため、事前課題で調べてきたお気に入りのカフェについて発表し、実際にサザコーヒーの店舗でコーヒーを飲んだ。ワークショップでカフェ的空間の役割を話し合い、魅力的なカフェで飲みたい紙コップのデザイン制作に取り組んだ。

① 事前課題 (好きなカフェに行き、店舗の魅力や気がついたことを書く) の発表

なぜそのカフェが好きなのか、シートに記入

② フィールド・ワーク：ひたちなか市内サザコーヒー店舗見学 (本店、勝田駅前店、MEGA ドン・キホーテ勝田店のうち2店舗)、コーヒーを飲む (図16)

③ ワークショップ「魅力的なカフェ空間の役割とは何か」

④ 経営理念を反映した紙コップの制作とコンペティション (図17)

各自デザインの理由を発表 グループで代表のデザインを選ぶ 全体で投票
鈴木太郎氏、砂押律生氏にも独自の目線で選んでもらい、講評をいただいた

【3日目】

3日目のテーマは「ひと」。企業の求める人材について、サザコーヒーで働く社員の話を聞き、意見交換をした。最後に講義、店舗見学、ヒアリング、ワークショップなどを通して得たことを活かして、新店舗の提案を行った。グループで出店の目的、店舗のコンセプト、地域貢献などを話し合い、新たな事業の展開として発表した。

① ワークショップ「企業が求める人材」

講師：砂押律生氏、小泉準一氏（取締役）、栗田愛美氏（店舗事業部・バリスタ）

② 社員とのトークセッション

③ 「サザコーヒー×地域×世界」をテーマにした新店舗の提案を検討

④ グループ発表

⑤ 講評と振り返り（講師：代表取締役会長 鈴木誉志男氏、砂押律生氏）



図 16 店舗見学



図 17 紙コップのデザイン制作

3) 授業の成果と今後の課題

受講生が提出した事前課題、毎授業のワークシート、授業後のレポート、およびグループワークにおける作業や発表の様子から、下記の成果が得られたと考える。

○地元企業の強みや特徴を理解したうえで、工場見学、店舗見学、ヒアリングなどを通して、地元企業の地域における役割を理解し、より具体的な目標の設定とプロジェクトの作成を行うことができた。

○企業の取り組みを経営的視点から見ることで、地域と世界とのつながりを認識することができた。

また、茨城大学水戸キャンパスにあるサザコーヒー店に対し、多くの学生の利用を促すため改善の提案がなされたことにより、当該企業から学生からの声を聞きたいという希望があった。そこで授業後、本学店舗で座談会を開催した。

一方、「5学部混合地域 PBL I A」と同じように、過密なスケジュールとワークショップの一貫性の欠如が反省点としてあげられた。基礎的な学びの時間や考えを深める時間を十分確保できるよう、授業スケジュールの見直しが必要である。また、授業初日が祝日・月曜日であったため台風による中止の判断、学生への連絡方法が課題となった。さらに「5学部混合地域 PBL I A」と「II A」の日程調整も課題としてあげられた。二つの科目を連続して実施したため、「PBL I A」の振り返

りを行う前に、「PBLⅡA」を開始することになった。来年度は2科目連続しての実施を避けるよう日程を調整することが必要である。

なお、「5学部混合地域PBLⅠA」と「ⅡA」の取り組みの概要と成果については、地域連携におけるアクティブ・ラーニングの取り組みを特集した *Juce Journal*『大学教育と情報』2016年度 No.3（私立大学情報教育協会）に掲載して紹介した。

（4）「5学部混合地域PBLⅡ」への発展

1) 取り組みの概要と改善点

平成29年度には「5学部混合地域PBLⅡ」を実施した。昨年度の反省をもとに、株式会社サザコーヒーと打ち合わせを数回行い、授業構成、活動の時間配分などを変更した。「PBLⅡ」においても、新たにひたちなか商工会議所の協力を得ることができ、主な学修活動を同所の会議室で行った。学修の全体テーマを「企業経営と地域貢献」とし、茨城大学周辺の出店、勝田駅周辺の出店、サザコーヒー茨城大学ライブラリーカフェ店を舞台とした企画・活用など、地域に密着したビジネスプランの提案を行った。店舗・工場の見学、顧客へのヒアリング、社員とのディスカッション、ワークショップなどを通して、サザコーヒーの経営の強み、魅力的なカフェ空間、企業が求める人材などについて考えたことを、自分たちのカフェ作りにはいかに活かすかが重要となる。

授業は、平成29年9月6日（水）～9月8日（金）に実施された。受講生は13名で、全員2年生（人文学部9名、教育3名、工1名）である。「5学部混合地域PBLⅠA」を受講した学生が半分以上を占めており、結果として人文学部の受講生が多数を占めることとなった。昨年度と比較して受講生が減少したのは、9月上旬に開講したことで帰省中で受講できなかった学生がいたためと考えられる。

6月27日（火）に水戸キャンパスで、同月28日（水）に日立および阿見キャンパスで説明会を実施した。昨年受講した3年生に感想を述べてもらうとともに、予習として授業の導入となる事前課題を課した。そのひとつとして、茨城大学周辺、勝田駅周辺、サザコーヒー茨大店について感じたことや気づいたことをまとめさせた。ほかに「あなたにとって魅力的なカフェの魅力」、「この授業で学びたいこと」について書いてくるよう指示し、授業初日の導入やグループ・ワークに活用した。評価は、「PBLⅠ」と同様に、事前課題、毎授業の振り返り用紙（ワークシート）、授業後のレポート、学習活動の関心意欲態度を総合して評価した。

2) 学修内容

【1日目】

1日目のテーマは「サザコーヒーの秘密を探る」。本店や工場の見学、講義、本店や直営店などでのヒアリングを通して、経営者側と顧客側の視点からサザコーヒーの経営の特徴や強みを考えた。ヒアリングの目的はサザコーヒーの秘密をさぐるためであり、そのために何を質問し、見てくる必要があるのかを確認した。インスタントカメラを持参し、カフェの外装内装などを撮影するようにした。最後にKJ法風のワークショップを実施した。協力者や活動の詳細は下記の通りである。

① ガイダンス、サザコーヒー本店・第1工場見学

案内：代表取締役 鈴木太郎氏、店舗事業部部长 砂押律生氏

- ② タクシー移動のあと、第2工場見学
 - 講義「サザコーヒーの経営と地域貢献—ひと・モノ・環境を中心に」（講師：鈴木太郎氏）
 - カップリング（コーヒー試飲）
- ⑤ タクシーでひたちなか商工会議所移動、店舗における顧客へのヒアリング
 - 協力店：サザコーヒー本店、勝田駅前店、水戸駅店
- ④ ワークショップ「サザコーヒーの秘密をさぐる」KJ法風
- ⑤ グループ発表・講評（代表取締役会長 鈴木誉志男氏）

【2日目】

2日目のテーマは「こんなお店をつくりたい」。事前課題で取り組んだ「あなたにとって魅力的なカフェの魅力」について意見交換した後、実際に店舗の利用客となったりサーチし、創りたい店舗に活かせるポイントを考えて。社員とのトークセッションを通してカフェで働く人の思いを知り、出店企画書づくりに着手した。最後にお店を象徴する紙コップのデザインを考えた。

- ① 事前課題「お気に入りのカフェ空間」の発表、ワークショップ「こんなお店を作りたい（1）」
- ② フィールド・ワーク：サザコーヒー3店舗（本店、勝田駅前店、水戸駅店）見学
 - 店でコーヒーを飲む、インスタントカメラによる撮影
- ③ サザコーヒーの社員とのトークセッション（図18）
 - 講師：砂押律生氏、小泉準一氏、安優希氏（大洗店店長・バリスタ）
- ④ ワークショップ「こんなお店を作りたい（2）出店企画書づくり」（図19参照）
 - 目的、顧客、サービスの内容、地域における役割、人材育成、人的交流などについて考える。
- ⑤ 経営理念を反映した紙コップの制作、プレゼンテーション



図18 社員とのトークセッション

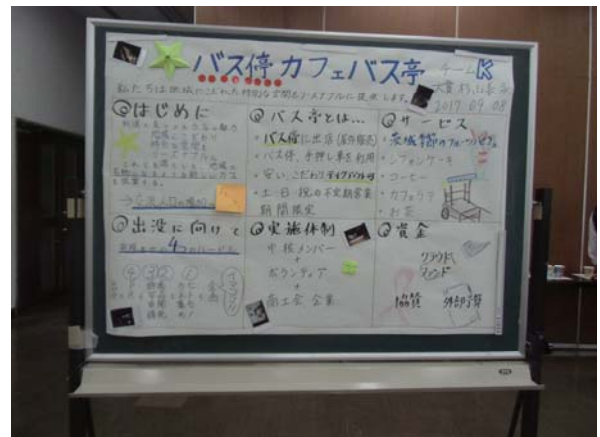


図21 学生による移動カフェのプラン

【3日目】

3日目のテーマは「さあ、こんなお店を始めるぞ!」。前日のワークショップの内容を踏まえて、タイトル・目的・活動内容・協働者・対象者・資金・時期・場所・準備期間など具体的なプランを作成する（図20参照）。現実的なプラン作成のため「相談室」を設け、砂押氏とひたちなか商工会議所の鴨志田聡氏からの助言を得た。

- ① グループごとにプレゼン準備

- ② プラン発表プレゼンテーション：4グループから次のプランが報告された（図 21）。
 バス停カフェバス亭、おひるねカフェ すやす・や、Fan cal café
 コーヒーfan になろう
- ③ 講評、全体を通じての振り返り

出店・企画の基本提案
(イメージ)

タイトル

チーム名：
メンバー：

Why? (私たちの出店・企画コンセプト)

Who? (誰が/誰と)

Where? (出店・企画の場所)

What? (どんな商品・サービス)

Whom? (誰に対して)

私たちのお店や
私たちは
地域でこんな存在に

例えば)
 地域での役割
 人と人の交流
 人間的な成長

図 19 出店・企画の構想サポートシート

企画提案書
イメージ

■お店の名前

■コンセプト

チーム名

作成: ...

■出店・企画の概要
例えば)
 ◎出店の狙い
 ◎出店・企画による
 地域の変化

●背景
 ◎自分たちの思い
 ◎出店・企画の地域の特徴

■出店・企画の内容・特徴

商品やサービスのイメージ等

■基本スケジュール
 ◎オープンの時期
 ◎何をいつまでに準備

時期
 オープン ← [] [] [] []
 アクションタ
 第1回

■実施体制
 例えば)
 ◎自分たちの運営スタイル
 ◎誰とやるの
 ◎支援は

■資金
 例えば)
 ◎調達方法など
 ◎店舗等の物件調査

図 20 企画提案書基本フォーム

3) 授業の成果と今後の課題

受講生のレポートなどの提出物には、次のような意見や感想が記された。

「サザコーヒーの店舗や工場を見学する中で、魅力的なカフェ空間の創造や地域との関わりについてのこだわりとノウハウ、また『人・物・環境』という永続的サイクルモデルを基本とする経営理念に、成功の秘密を知ることができた。」(人文学部2年)

「経営に詳しい人にお話を伺いに行ったり自分たちで学び、技術を身に付けたり、物件探しや協力者探し、物資の調達を行ったり、助成金やクラウドファンディングによって資金集めをしていく。自分たちだけでは、資格も持っていないし分からないことも多いので、協力者や相談相手は必要不可欠である。これらのことを進める大前提として、チームメンバーが本当にカフェの出店を実現させたいか、熱い思いはあるか意思の疎通を図る、もしくは実現させたいメンバーで集まる必要がある。カフェに対する思いがないと継続していくことはできないと考える。」(教育学部2年)

このほかの受講生の提出物、およびグループワークにおける作業や発表の様子から、学生たちが地元企業の役割や課題を理解し、現地調査などを通して、具体的な目標の設定とプロジェクトの作成を行うことができたと考えられる。また、地域・企業と一体となった地域の未来づくりの提言を行うことで、地域の課題を主体的に考え、地域で積極的に行動しようとする意欲がより高まったこと、他学部の学生と話し合いを通して、多様な考え方を知る機会を得、視野が広がったことがうかがえた。

授業運営については、過密なスケジュール、ワークショップの一貫性の欠如、台風の対策などの課題は解決したが、さらなる学修効果を高めるために、次の反省点があげられた。

○日程調整

協力先と相談のうえ授業日を9月上旬に設定したが、帰省中の学生のことを考えると来年度は9月中～下旬に設定できるよう調整したい。PBL I と PBL II の間に片付け、準備、振り返りを行う日数を設けて余裕のある授業運営を行いたい。

○説明会の周知

日立キャンパス、阿見キャンパスでの説明会にほとんど学生が出席しておらず、5学部混合の効果が高めるためにも説明会の情報伝達を強化させる。

○時間配分の再検討

2日目のトークセッションを車座で行いディスカッションが盛り上がったが、時間が延長したため来年度は30分長く確保する。

○出店プランの対象の再考

プランの実現の可能性を考えると、茨大周辺よりも、勝田駅周辺に絞った方がフィールド・ワークの効果が高く、相談役の助言も反映されやすい。来年度は、サザコーヒー茨城大ライブラリーカフェ店への提案と勝田駅周辺(空き店舗利用)の出店について考えさせたい。

○ワークショップの指導の向上

ワークショップで「KJ法風」について説明する際、学生たちに混乱が生じた。実際に付箋紙をどう動かすか、タイトルをどうつけるかなど、パワーポイントで写しながら丁寧に具体的に説明する必要がある。ワークショップ特有の言葉ではなく、わかりやすい言葉で指導し、その活動がどうして必要なのか理由を伝えないと理解しにくい。指導者がワークショップの方法を理解し、指導法

を習得することが大切である。

なお、「5学部混合地域 PBL IA・IIA・I・II」の学習内容は、COC 事業 Facebook Page「地域をデザインする茨城大学」を通して社会に発信した。

おわりに

本稿では、2年間にわたる「5学部混合地域 PBL」の実践の比較を行うため、「PBL I」と「PBL II」の取り組みを中心に論じた。前年度実施した「PBL IA」「PBL IIA」の反省や課題をもとに、授業内容の改善と学修効果の向上を目指した成果の報告でもある。地域をフィールドに行う PBL 科目において、連携先との良好な関係を構築することがより充実した授業の運営には不可欠であるが、今年度からひたちなか商工会議所の協力を得られたことは大きかった。授業運営や指導法に残された課題は多いが、地域の協力者との連携を深め、さらに充実した授業を展開できるように努めたい。

今年度から新たに「5学部混合地域 PBL III」が開講した。1年次以上を対象とし、茨城県、常陸大宮市など自治体と連携して実施する PBL である。また来年度は、留学生とともに英語で茨城県の魅力を発信する「5学部混合地域 PBL IV」が開講され、地域志向教育とグローバル教育を担う科目となることが期待される。「茨城学」全学必修を通して、地域の課題を知り、関心を持つ1年生は確実に増えてきている。「茨城学」の次に受講する地域志向科目として、「5学部混合地域 PBL」が増えることは望ましいことである。

「茨城学」開講と同時に、学生の地域活動への参加・参画のきっかけを作る場として「イバラキカク」というプラットフォームを設立した。そこに集まってきた学生は、地域でやりたいことを企画し、仲間を集め、地域社会や企業と連携して授業外で行う学生主体の PBL を行っている。そこから「学生地域参画プロジェクト」（学プロ）に展開するものもあれば、地域からの協働依頼によりプロジェクトとして活動を開始するものもある。

このように「茨城学」から PBL、「学プロ」へと、授業から学生主体の PBL へとという流れが構築されている。そのような流れの中で「5学部混合地域 PBL」は学生の地域活動への参加・参画のきっかけを促す新しい場となりつつある。たとえば「PBL I」の受講生が、授業後に「ひたちなか表町商店街活性化プロジェクト」を立ち上げ、10月の学生地域参画プロジェクト（スタートアップ支援）に応募した。採択後、ひたちなか商工会議所、ひたちなか市役所、「PBL I」の講師を務めた藤田氏とともに、表町商店街にある市民交流拠点「ふらっと」の新たな活用法について意見を交換した。その後、ひたちなか市でまちづくりのワークショップに参加するなど、今後の



図 22 『茨城新聞』平成 29 年 9 月 12 日号

活動の発展が期待される。

今年度は学生の発表時に連携先のサザコーヒーやまちづくり株式会社をはじめ、ひたちなか商工会議所やひたちなか市役所からの聴講者が増えた。まちづくりに関わる大人からの助言や指摘によって、学生たちの中に良い緊張感が生まれ、自らのプランの欠点や課題に気づき、どうすれば解決できるか、さらに深く考える機会となった。PBLⅡの最終日にはメディアの取材が入り、本学の地域志向教育に対する社会の関心と期待の高さを実感した(図22)²。今後ますます学生の主体的なPBLが増えていくことが予想されるが、その契機となる地域志向教育、特に地域をフィールドにアクティブ・ラーニングで行う「5学部混合地域PBL」の一層の充実が重要になっていくであろう。

謝辞

「5学部混合地域PBLⅠ」および「5学部混合地域PBLⅡ」の企画・運営は、COCコーディネーターである西田卓司氏、渡辺啓巳氏、桑田明氏と協働して実施した。記して謝意を表したい。

引用文献

清水恵美子. (2016)「茨城大学の地域志向教育と新しいPBLの取り組み」*Juce Journal* 大学教育と情報, 2016年度 No.3, 14-17.

¹ 本稿に掲載した「5学部混合地域PBL」実施に係るワークシート(図10, 12, 19, 20)は、COCコーディネーター渡辺啓巳氏の作成による。

² 執筆者はひたちなか商工会議所の依頼により平成29年11月24日同所常議員会において「ひたちなか市の未来作りへの提案—『5学部混合地域PBL』を実施して—」をテーマに講演を行った。ここからも学生の地域活動に対する社会の関心の高さがうかがわれる。